

屋久島植物採集記

藤 本 義 昭

1964年7月20日

神戸市立北須磨小学校藤岡昇、町口篤弘、和田岬小学校山崎孝、妙法寺小学校谷口博の諸氏と筆者の5人が、それぞれ重いリュックを背負い中突堤に集合。互に顔を見あわせ荷物の重さをくらべあう。中味は新聞紙、米、寝具、雨具など。6月中旬よりたびたび集まり、打合わせを重ね、いよいよ屋久島への採集行。皆の顔に喜びがあふれている。

17時半乗船、定刻18時出帆。冷房の効いた船中でぐすりねむる。

7月21日

7時別府着。山登りのトレーニングとて、リュックを背に別府駅まで歩く。この荷物で登山は不可能かと思われるほど重い。途中たびたび休み、リュックをずり上げる。

列車を待つ間に駅前で朝食。7時55分発の準急日南号に乗車。座席指定のおかげで、がら空きのまま車窓の植物の移りかわりを楽しみながら鹿児島へ。

飛行機の予定が、荷物が重すぎて超過料も多いので船にすることに決める。地方公務員宿舎さつま荘へリュックを置き城山へ採集に行く。アマクサンダ、ハチジョウカグマ、ハマホラシノブ、オオバチドメグサなどを採集。城山のトンネル入口の斜面にあるコササキビの群落が特に目につく。

夕方港へ行き船便をしらべるも、22日はなし。夜相談の結果桜島へオオヤグルマンダ、サクラジマイノデを見に行くことにする。

7月22日

朝食後、小雨の中を桜島へ。東桜島出張所をたずね、湯元の風穴のある所を聞く。所長さんのご厚意により案内の人をつけてもらう。

案内の人のでくるのを待つ間、出張所付近を採集。フジツギ、センダン、ヤブマオ、イタドリ、タマンダ、メドハギ、ススキ、トゲソバ、アコウ、ツユクサ、オヒジワ、キレバヤブソテツ、クサギ、ハマスゲなどがみられる。しばらくして、案内の人が来る。雨の中の登山はよく蒸す。農家の庭先にハヤトウリの花や実が目につく。ムラサキネズミノオの穂が美しい。40分ばかりで風穴につく。

昔はミカン等の保存に利用したとの話。10°C位で大

変涼しい。ここのオオヤグルマンダ、サクラジマイノデが天然記念物に指定されているため、写真をとるだけにとどめる。周囲にはキョウタキンダ、イノモトソウ、ゼンマイ、ウラジロ、タニウツギ、ナガバノモミジイチゴ、ツワブキ、フキ、ヤツデ、ヒサカキ、ヤマブキ、ウリカエデが生え、上層をスギが覆っている。

30分ばかり見学の後下山、所長さんにお礼を言い、海岸に出て昼食。

この辺の海岸は溶岩でできているため荒削りな感じが強い。生育しているものの多くはツユクサ、センダングサ、ケカモノハン、ネズミノオが多く、これらの後方にオオマツヨイグサ、ハマナタマメ、イヌタデ、ヒナタイノコズチ、オニヤブソテツなどがある。斜面の上からはアコウの大木が気根を下ろしているのも面白い。

袴腰の村営水族館を見学して夕刻さつま荘に帰る。さつま荘より桜島の噴煙をあかず眺める。

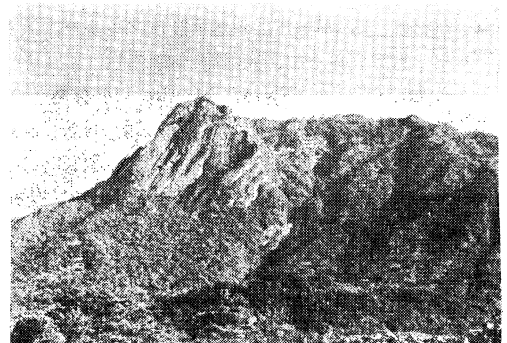
7月23日

屋久丸で鹿児島港を8時出帆。思ったより大きい船、それに冷房がきいているので快適。途中晴れわたり、波もおだやか。宮の浦に寄港し、安房には14時30分着、沖がかりしてはしけに乗る。上陸後すぐ営林署に行き採集の手続きをする。

地理不案内と荷物の大きいのにまごまごしているうちに、小杉谷行きモツチヨムのトロッコがでてしまう。路傍に荷物を置き相談。先ず尾の間に行き本富岳に登ることにする。

バスで「尾の間」へ、下車後停留所前より旅館湯之峯荘まで約1.5kmを農協の三輪トラックに便乗。

祇園さんの祭りで、夕方に旅館の庭で土地の若者達の奉納の踊りが催される。



尾の間より見た本富岳

夕食までの約30分間に泉源を見に行く。2m近いへゴが印象的。路傍の畦にハイヌメリ、カルカヤ、ハイキビなどが繁茂している。

7月24日

尾の間より原までバスで出る。原より本富岳に登る。サクララン、イタチガヤ、ハマホランシノブ、シラタマカズラなど採集しながら海拔300m位まで道に迷うこともなく行くが、この辺より背丈をこすウラジロの林になり道を見失う。植林された杉林を通り岩壁の上に出ては方向を見、道をさがすも進めず、少し道らしい所を進んでは引き返えしたり。

本富岳登山記録の略図と $\frac{1}{50000}$ の地図、それに高度計、クリノメーターで方向を決めて登りにかかるもウラジロのジャングルにさえぎられ進めず。

やむなく引き返して谷川へ下りる。水の無いのを幸いに谷川を採集しながら進む。エダウチホングウシダ、ヘゴ、ツルラン、リュウキュウヤブラン、ハマホランシノブ、ショウキラン、ササクサ、ケイビラン、ガンセキラン、ナンカクランなどが谷の両側に多く見られる。

500m近くでおそい昼食。コ克蘭、ミヤマムギランが多くなる。滝のように流れる汗。しまいには目に入っても痛みもない。全身ずぶぬれとなる。道でない所をわけ登るので時間がかかり、また体力の消耗がはげしい。

15時過ぎ、大きな岩場の下にでる。このあたりはナツツバキ、シイ、アカガシが上層を占め、中層にはカナクギノキが広がる。低木層にはアオキ、アオモジ、カナクギノキがあり、地表近くにはマンリョウ、トウゴクシダ、ホソバオオカグマ、ユノミネダ、サワアジサイ、エダウチホングウシダ、キジノオシダ、ミヤマウズラ、サクラツツジ、ガンセキランなどが点在している。樹幹にはマメツタがたくさん着生している。標高は660m、傾斜42°、方位NW.30°である。

岩場に沿い西に200mばかり移動して、また急傾斜面の林をよじ登る。720mの所に大きな岩があり、アツイタ、キクバコケシノブが見つかる。落葉をかき分けるとヤマグルマ、アズキガイ、トノサマガセルが見つかる。

小休止の後また登る。ナツツバキ、カナクギノキなどが茂りうす暗い。これらの地表より1mくらいの樹幹にクモラン、マメツタ、ミヤマムギラン、ムギランが着生している。点々と露出している岩上にはミヤマムギラン、アツイタ、ムギランが着生。地表にはツルラン、ガンセキラン、コ克蘭、トクサラン、ミヤマウズラなどがある。携帯土壌pH測定器でしらべると6～6.2を示す。

ガスがかかり、時刻も17時を過ぎたので登頂を断念し、もとの道を下りる。

200m近くまでくると谷川に水が1ばいに流れ下れず。

やむなく尾根へでることにしてウラジロの林に突入。丈の高いウラジロだけに手でかきわけるくらいでは進めず、体ごとぶっつけて体重でおしわける。数m行っでは交替しながら進む。ウラジロの胞子を充分に吸う。旅館でこの話をすると、道を迷わずに登れば小学生でも2時間余りで頂上にでると、でもこの行程は苦勞が多かったが、かえって収穫が多いのだと思う。

7月25日

10時頃まで昨日の採集品の整理と荷造り、発送にかかり、11時のバスで栗生へ向う。

午後栗生中学をおとずれ、ツキイゲ、タイワンカモノハシ、メヒルギの自生地、アカウミガメの産卵について尋ねる。

ちょうど東京教育大学の藤原先生がアカウミガメの研究で来ておられるとの話で、早速同校の理科室に行き、話を伺う。その要点を略記すると次のようである。

産卵期間 7月上旬～8月中旬

産卵時刻 P.M. 9～11時 A.M. 2～3時

産卵回数 年2回(上記の期間中に)

産卵数 90～230個(1回に)

孵化日数 50日±1日早いのは40日、中には60日を与えるものもある。

成亀の甲長 98～107cm

孵化した90%は海に入るが、魚の餌などになり、2～3%が残る。またここの亀は屋久島の陸棚にすみついたものであろう。亀の餌は甲殻類、藻類が主である。産卵時に涙を流すのは悲しいとか苦しいとかでなく、潮風が涙腺を刺戟するためであるなど面白い話を伺う。

栗生中学ではこの海岸にくるウミガメの採卵権を持ち、町民達は一切とらず、中学生から購入している。中学ではこの費用を文化施設費につかうとの話、卵は3個10円で求められた。

中学校で飼育しているヤクシカを見て砂浜にでる。ツキイゲの群落に目をみはる。キキョウラン、モンカタバミ、ポタンボウフウ、ワラビ、テンツキ、ハカマカズラ、グンバイヒルガオ、ネコノシタ、コウライシバ、ハマオモト、ハマナタマメ、ジャリンバイなどの混生する砂浜、屋久島で唯一の砂浜である。

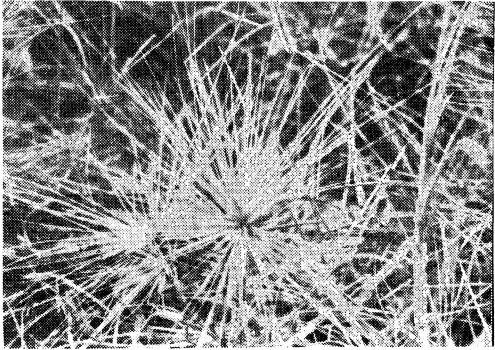
小楊子川尻の方に廻り、メヒルギの群落を見る。白い小さな花が一ばいについている。林の下には萌芽しかけた状態の果実が多くみられる。

クロマツの林の前面にダンテクが大きく茂り、タイワンカモノハシの群落が広がる。

夜はウミガメの産卵を見に行く。21時過ぎ1頭があがってくるも見物人が気になったのか、波打際より15mばかり上ってすぐ引き返してしまった。23時頃、4頭が前後して上陸、産卵、暗闇で待つこと10数分、産卵がはじ



メヒルギの開花



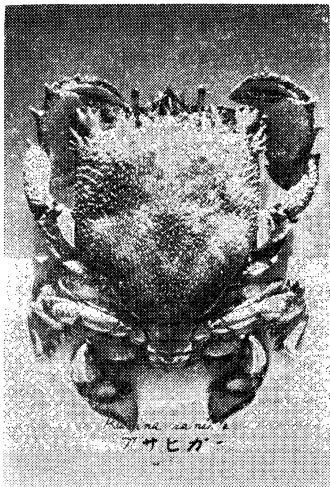
ツキイゲの花序

まり電燈をつけてよく見る。背中に大きなカメフジツボがついている。1時頃宿に帰る。

7月26日

昨晚、宿の主人に頼んでおいたので早朝より漁師が迎えに来てくれる。土地の人のいうアンボウガニ（アサヒガニ）採集のため船をだしてもらう。

採集のしかたは40×80cmの針金の枠に網を張り、真中にトビウオのぶっ切りをつけたものを80枚近く、紐で2



アサヒガニ

～3mおきにつないだものを海底に沈め、30分余り待つて引き揚げるのだ。多いのには2～4匹もついている。

アサヒガニは水深30～50mの砂地に棲息している。この魚の最盛期は6～7月中旬と説明してくれる。

カニの採集のあと平磯(栗生の浜より約1km沖合の磯)の間に舟を入れ、岩礁で貝の採集をする。ヤクシマダカラ、ハナマルユキ、ハナビラダカラ、メンガタダカラ、シボリダカラ、ヤコウガイ、ギンタカハマ、トコブシなど洞乱に各自1杯以上とる。昼食のおかずにと漁師が潮流によってくるイワシのような魚を手網で舟の生けすいっばいにすくいあげ、頭をとっただけの即席の刺身、美味なのに驚く。

夕刻港に帰り、旅館へ帰る途中子供たちがヤクシマダカラ、ハナマルユキを石や金槌で割って生食しているのを見る。口のまわりを紫色に染めている。“ウマイカ”と聞くと“ウマイ”という返事。見ていて殻のつぶれるのが勿体ない感じ。

近所のおばさんが、“ゆでた貝をやるう”というのでついて行くと、ジイガセ、フジツボ、ヒザラガイ、カメノテなどのゆでたものをくれる。少しもらって帰りこわごわ試食する。美味なのに驚く。何でも食べてみることでと改めて感じる。

夕食の膳には昼の収穫アサヒガニがのる。美味。大きいのを1匹ずつ標本にして持ち帰る用意をする。

7月27日

昨日の採集品の荷造り、貝は幾重にもビニール袋に入れ密封。その後急いで小楊子川に沿いさかのぼる。

アマモシラン、ヘゴ、オオタニワタリ、シマオオタニワタリ、クサマルハチ、ヘラシダ、ホングウシダ、ヤリノホクリハラン、ヌカボシクリハラン、シンテンウラボシ、ヒメタカノハウラボシ、タカノハウラボシ、キジノオシダ、オオカナワラビ、ミドリカナワラビ、マメツタ、ニセシロヤマシダ、シロヤマシダ、ヘッカシダ、シロヤマゼンマイ、サイゴクホングウシダなどシダ植物の多いのに驚く。腊葉もそこそこに昼前のバスに乗り安房に向かう。車中居眠りの連続。

安房より小杉谷へは営林署の林用軌道があるが、これには便乗できない。代りに屋久島観光協会が、屋久島丸の入港する日の午後3時半に専用トロッコをだしている。運輸省の認可がないからと、使用料名義で300円の乗車賃をとるが受け取りも何もなく、荷物代も50円だったり100円だったり。満員になると増結した無蓋車に乗せて100円だったり、200円だったり、女客であれば甘えると安くなる。とに角いい加減な料金で定刻発車。よく茂った木々の間から谷底深くに満々と水をたたえた安房川がちらつく。20kmを右に左にまがりながら1時間半近くかかって終点小杉谷へ。途中屋久杉の原生林を眺め、

広葉樹の大木を見ては着生植物はいかにと目をこらす。

小杉谷の営林署事務所では証明書を見せ諒解を得る。ちょうど小学校の下校時(高学年)で、石塚へ帰る生徒の専用トロッコがあるので便乗を頼み石塚の営林署公民館へ行く。

ここではじめて自炊、コップエル、米、シュラフ等が役だつ。手わけをして炊事にかかる。谷口氏が燃料の代わりに電熱器を持参、これが炊事の花形となる。しかし燃料、コップエル、シュラフは別として重い米、かん詰め類は営林署の売店で入手できるのに、本当にご苦労さんなことだった。しかも料金も神戸と変らぬのに。

夜はじめて雨、どしゃ降りとなる。雨でも登山決行に決め、弁当、朝食を準備、明日を安じながらねる。

7月28日

午前3時起床。町口、山崎両氏は4時より出発。午後2時に花の江河で会うよう打ち合わせる。2人は花の江河より上を主に、筆者等3人は花の江河までを調べることにする。少しおくれて4時半出発。昨夜の雨も晴れる。今までの屋久島採集記を読んでも雨中の採集が多いが、われわれは晴天に恵まれている。

軌道に沿って登りながら採集をはじめ。石塚で標高720m。タカノハウラボシ、ヒメハンゴシダ、シケチンダ、ハンゴシダ、ホンゴウシダ、ユノミネシダと相変らズンダが多い。その間にチャボホトトギスがまじる。ヒカゲツツジの手ごろなのがたくさん生えている。きりたった斜面にはモウセンゴケ、ヒカゲノカズラがみられる。

940m付近ではナツツバキ、ヤクスギ、ハリギリ、リョウブ、コシアブラ、ウラジロイチゴ、キッコウハグマ、モミジバハグマ、リンゴツバキなどがみられる。

1,100m位まではヤクスギの伏採したあとで白い肌をみせた切り株がごろごろして、白骨の散らばったような風景。1,160mから軌道もなく、よく茂った山の中の小径となる。ヤクスギ、ナツツバキ、ヤマグルマが高木層を占め、低木層にはナツツバキ、リョウブ、ミツバツツジ、ヒサカキ、オオカメノキがあり、その下にベニシダ、キジノオシダ、タムシバ、ゴヨウオウレン、ハリギリ、フタリシズカ、ヤマボウシなどが生えている。

1,340mになりヤクシマジャクナゲが見られる。その辺の樹木を注意してみるとオオクボシダがついている。ホツツジの花が美しい。

1,500m付近からヤクシマジャクナゲの大木がでてくる。この辺のヤクスギは直径3m近くもあるが低く、先は枯れて白い樹肌を見せている。

14時頃花の江河の山小屋跡につく。雪のためつぶれている。付近に黄色のテントが散在している。

小屋跡より300mばかり進み湿原につく。湿原の片すみに“国立公園、花の江河、1,700m”と大書した立札

がある。3人で記念撮影をして昼食。

湿原の水たまりにはヒキガエルのおたまじゃくしが泳いでいる。シバ、コケオトギリ、ホザキノミミカグサ、ウメバチソウ、モウセンゴケ、ハイキンボウゲが生え、湿原の土壌はミズゴケからできている。

花の江河から宮之浦岳、永田岳まで約2時間で行けると、下山してきたキャンパー達の話。しかし石塚まで帰ることを考えて断念。15時頃ようやく先発の2人が下山してくる。宮之浦岳頂上付近にはヤクシマヤマダケが群生しているとの話。もう1度5人で立札を背景に記念撮影をし、16時前に下山。

所々においた採集品を集めながら石塚へ、20時前に公民館につき食事。

藤岡氏は前の家にあるヤクシマジャクナゲをゆずってもらうべく交渉にでかける。約1時間ばかりして笑顔で帰ってくる。1斗樽に植えこまれた高さ50cmばかりのヤクシマジャクナゲで、よく茂り手入れがゆきとどいた見事な品。3年間作りこんだというだけに活着間違なし、羨やましいがぎり。



花の江河で(標高1700m)
藤本 藤岡 山崎 町口 谷口

24時すぎ、シュラフにもぐり込む。

7月24日昨日の採集品の整理、荷造りに昼までかかり、昼食後小杉谷まで採集。筆者と山崎氏の2人は安房にでることにする。他の3人はもう1日石塚に泊ることにする。

小杉谷より5人揃って3代杉の見学に行く。初代は横になり空ろで、その上にまたがるように2代が伸び立ち枯れ、その上に3代目のスギが伸長している。高温多湿という条件がこのような生育を遂げさせたものだろう。近くで作業している人達に聞くと、もっと上にはこうしたスギがたくさん見られるとのこと。ウイルソン株は遠いという話でやむなく3人と別れ引き返す。

トロッコに満載した杉丸太の上に乗せてもらい、ゆられながら30分余りで小杉谷につく。

小杉谷より先日の屋久島観光のトロッコに乗る。ヘゴ、クワズイモなどを見ながら下る。安房に18時半頃に

着く。ここでまた料金、下りは我々の外3人しかいなかったが、我々2人の荷物が大きいからと荷物代を請求される。交渉の結果1個30円にする。下りの料金200円也。

山に残った3人分の採集品と自分の荷物をかつぎ、よたよたと200mばかり離れた安房館にたどりつく。

荷物の整理、今日の採集品の整理、発送準備をしてゆっくり手足をのばす。夜はどしゃ降り。

7月30日

採集品の発送をしたのち、午前中は軌道に沿い5kmばかり登る。イタチガヤ、ホラシノブ、ヒカゲノカズラ、ヘランダ、コシダ、コブナグサ、ヌメリグサ、チドメグサ、ササクサ、ササキビ、ススキ、モウセンゴケ、ヘゴなどが軌道沿いの掘り割りの崖に生えている。

イタチガヤは水平な地面にはなく傾斜が80°位のところに生育しているのも面白い。

ヘゴの30cmばかりの株を掘り取る。オオタニワタリ、クリハラン、ヌカボシクリハラン、ヘランダ、ホンダウシダと相変らずシダが多い。

午後は海岸にでる。珊瑚礁の侵蝕された海岸で、後方にクロマツの林があり、クロマツの疎林にはヒトモトススキ、ダンチク、ハイキビが混生している。その前にはネコノシタ、ハマゴウ、コウライシバ、スナシバ、オニシバ、ケカモノハンなどが生える。珊瑚礁の割れ目の間にはコウライシバが点々とき、黒一色の海岸にいろいろをそえる。

タイドプールがあちこちにあり、その中にはシラヒゲウニ、オキナガニ、ショウジンガニが見える。色の鮮やかなチョウチョウウオなどが泳ぐ。本州ではなかなか見られないところだ。磯採集を夕刻まで続けて旅館に帰る。小杉谷より下山した3人と合流、互に無事？を喜ぶ。収穫物を見せあい、整理や荷造りをする。

磯採集の時とったナガラメ50個あまりを肴に乾杯、屋久島最後の夜を痛飲し歓談する。

7月31日

台風気味でうねりが大きい。朝8時半出帆の折田丸に乗る。屋久島丸より小さく、寄港地も多く時間がかかる。それによく揺れる。

鹿児島湾近くより開聞岳が美しい姿を見せる。16時半鹿児島入港。すぐ駅へ、17時半発大阪行の急行城山号に乗車、わりに混むも座席を確保できる。うとうとまどろみながら一路神戸へとむかう。夢は次の採集地礼文、利尻をたどる。

8月1日

13時神戸帰着、それぞれの採集品を抱え家路に向う。

この採集行を通じて雨にあったのは桜島と栗生より安房に向うバスの中で20分ばかり、それに石塚に泊った晩、安房に泊った晩で、結局屋久島で採集中には雨にあわず。本当に天候に恵まれた採集行であった。